

〔礪山千鳥〕旅宿

いにしへはいはゆる草枕にて野にも臥山にもいこひけむを貴人は帳の幕など馬につけて、そをもてとりかこみつ、一夜をあかしたるものなるを治れる御代のたふときは、其草枕も名のみとはなれりしなりかくてはたごやといふは、かのとばかりの幡を納めたる籠をはたごといふよりうつりたる名也、今は本陣といひ、脇本陣などくさくさとなへたり、またちかき頃、難波講、大船講、關東講など名づけて、その目印を軒にかけたる、また某家中定宿、某用達などゑるしてかけたるもあり、

〔萬葉集二挽歌〕有間皇子自傷結松枝歌二首〇一首略

家有者イニアレバケ筒爾ニモル盛飯イヒ乎ヲ草枕クサマクラシ旅爾ニ之有者シアレバ稚之葉シノハ爾盛ニモル

〔萬葉集十九〕閏三月〇天平勝於衛門督大伴古慈悲宿禰家、餞之入唐副使同胡曆宿禰等歌二首〇中略

梳毛クシモミ見自屋中ミジヤ毛波モハ可自カシ久左麻クサ久良クラ多婢タヒユ由久ユク伎美キミ乎ヲ伊波布等イハフト毛比氏モヒノ作主未詳

〔萬葉集抄十九〕くしも見じ、やなかもはかじと云は、人のものへありきたるあとには、三日は家の庭はかす、つかふくしをみずといふ事のある也、

○按ズルニ、驛路ニ菓樹若シクハ柳等ヲ植エテ、行旅者ノ便ヲ計リシ事ハ、植物部ニ載セタルバ、宜シク參照スベシ、

〔徒然草上〕いづくにもあれ、しばし旅だちたるこそ、めさむるこ、ちすれ、そのわたりこ、かしこ見ありき、あなかびたる所、山里などは、いとめなれぬ事のみぞおほかる、都へたよりもとめて文やる、其事かの事便宜にわするなといひやるこそおかしけれ、さやうの所にてこそ、萬に心づかひせらるれ、もてる調度までよきはよく、能ある人、かたちよき人も、つねよりはおかしとこそ見